

負け戦身にしみじみと味ひぬ家をし焼かれ親を殺さる

愛国心無きにあらねど家焼かれ御尤（ごもつとも）とは思ほえなくに

筆に舌に敵撃滅の雄たけびを吾はもあげむ足萎ゆれども

ひと夜にし運命変りしわれ等なり寂しく生きんうつしこの世に

胸ぬちに怒り焰と燃ゆれども足萎え故にすべあらぬかも

戦はむ力さへなき足萎えしわが家を焼きぬ敵アメリカは

人の家の座敷を借りて住むは憂し夜遅く風呂に入りて寝るなり

気がねして人の家にし住むよりは不自由してもわが家に住みたし

作者プロフィール 中村徳之助(明治二十九年〈一八九六〉～昭和三十八年〈一九六三〉)歌人。現・蔵町の生まれ。三歳のときに罹った麻疹が内攻して肺炎、関節炎、化膿性骨髄炎を病み、五歳ころから足萎えの見に。大正二年（一九一三）四月から近所に新居を構えた三谷蘆華に師事し、歌誌『創作』に投稿。郷土文芸誌『かはたれ』『ヒヒラギ』『郷土芸術』『コスモス』などにも参加する一方、大正五年からは歌誌『アララギ』にも参加して、「三重アララギ会」発足に尽力。昭和八年に歌集『埋木』を出版し、昭和十年から「四日市歌の会」を結成。戦後の昭和二十一年夏には「三重アララギ歌会」を復活させ、最晩年は慈光院ホームで余生を送った。

⑦ 瀬田栄之助「祈りの季節」抄（『近畿春秋 創刊号』伊勢新聞社、昭和二十一年）

雅子の発狂

見当のつかぬ作業だけに、徹二はひどく疲れた。……鋤（すき）を持つ手が痺れるやうに痛む。焼跡から姉、和代の死体を掘り出さうといふのだ。焼棒杭と焼瓦の間隙から立ち登る煙に咽びながら、徹二の作業は正午近く迄続けられた。

六月の太陽は、流石に暑かった。彼は昨夜、空襲と同時に避難した儘のチバミシャツと半ズボンの恰好なのだが、それでも、ねつとりとした脂汗が軀にま

とはりつき、堪らない程の渴を覚えた。今迄、だゞつ広い屋敷に住んでゐた積りでも、いざ焼跡となつて見ると、我がとの敷地も案外、手狭に感ぜられるものだなあとそんな錯覚を頭の中で是正しながら、湯殿のタイル煉瓦の上に腰をかけ、一息入れてゐると、無花果の樹の傍で今迄眠つてゐた雅子が「うゝん」と奇妙な唸り声を出して眼をあいた。雅子は有賀家の長女で、次女の和代と共に徹二にとつては姉にあたる。雅子は、十年前或るサラリーマンと不幸な結婚をしたが、一女、ルリ子を出産すると同時に突然、発狂した。そして、その後、間もなく雅子に続いて発狂した長男の正明と共にY市の精神病院に入院してゐたのだが、以前は可成り盛大に料理屋業を営んでゐた有賀家も、戦争の余波を受けて次第に不振を極め、二人の莫大もない入院費の捻出に当惑した結果、父の伊三郎は、三月程前から、比較的病勢の軽い雅子だけ自宅に引取り、一階の一室に置いてゐたのだつた。

「……どうしたんだい？ 姉さん……」

徹二は、雅子に言葉をかけた。

「……む……ウ……ミ……ズ。……」

最近、雅子の精神分裂症は異常に、昂進し言語障害すら起してゐた。しかし、徹二には、やつと、彼女が「水」を欲してゐるのだと判断がついた。しかし、付近の井戸といふ井戸は破壊つくされてゐる。だが、苦しんでゐる姉の為に一滴でもいゝ、水を探してやらねばならぬと彼は思った。彼は、少し邪慳な仕打だと思つたが、彼女をしごきで無花果の樹に縛りつけた。彼は水を捜しに行く間に雅子が脱走するかも知れぬと思つたからである。

彼は、水を求めて数町離れた川原に向つて歩いた。昨夜以来、何一つ食べてゐない体故、今更のやうに空腹が身に堪へた。途中、罹災した顔見知りの町内の人達の幾人かに出会つた。極度の疲労感と予知しなかつた急激な衝撃の痛手の生々しさに、お互に口をきく元気さへ失つてゐた。黙つて、目礼して分れた。

……それにしても、昨夜、避難した儘、雑沓の中で見失つた父の伊三郎、母のしき、妹の美枝、それに姪のルリ子の四人の消息が徹二には、むしように気にかゝつてならなかつた。昨夜の阿鼻叫喚の中にあつて、徹二は最後まで、自宅に踏み留まり、みんなを避難させてやつた。途中で不慮の事故のない限り、みんなは無事であるべきはずだと一応自分にさういひ聞かせるものゝ、次々と不吉な連想許り浮んで来て、彼は自分で自分の心の遣り場に困つた。

作者プロフィール 瀬田栄之助（大正五年〈一九一六〉～昭和四十六年〈一九七一〉）小説家。大学教授。現・泊町生まれ。旧制富田中学校を経て大阪外国語学校スペイン語部在学中から文芸誌『文藝首都』『若草』に詩を投稿。卒業後は日本郵船に入社し、北米及び南米七カ国を歴訪。昭和十六年召集、鯖江の迫撃砲隊に入隊するが石原産業四日市工場の外国兵俘虜収容所の通訳に転じ、

後にマレー半島を転戦。昭和二十一年復員後は石原産業に就職し、小説「祈りの季節」「偽りの青春」等を発表。昭和二十八年天理大学スペイン語科講師となり、後に教授に。この間、同人誌『人間像』『関西文学』などや新聞・雑誌に多くの作品を発表。昭和四十五年創作集『いのちある日に』を出版し、翌年一月にはスペイン文学の紹介、翻訳に対して、スペイン政府より「イサベル女王勲章」を授与された。

⑧ 瀬田栄之助「娼婦ABC（第一回）」抄（『故郷 FURUSATO 緑風号』アサギ書房、昭和二十三年）

序章

此の街の中央をM川が横断してゐた。M川に架けられたM橋を境界線として、その北部を橋北と云ひ、その南部を橋南と云ひ慣らされてゐた。可笑しな事に、橋北と橋南とはまるで、人種が違ふかのやうに、種々な面に於て昔から交流はなく、各各がその古い殻の中に閉籠つてゐた。此の街を訪れた或る著名な外来者は、仲違ひをした兄弟のやうな水臭さだと評したが、正に当らずと雖も遠からずの感があつた。総ての生活の環境と条件との根本的な相違がその主なる原因であるやうであつた。――

第一次世界大戦後、暫く続いた財界の好景気は此の街の形相に模様の変化を与へた。橋北地帯には数多くの町工場が創立された。そしてその町工場の殆んどは、申し合せたやうに陶器工場であり、その製品は遠く海を渡つて、米国、豪洲に輸出された。やがて、此の街の陶器は、特産物として、小学校の地理書にも記載されるやうになり、それは、又、此の街の景気のパロメーターにもなつてゐた。

橋南地帯は、俗に云ふ下町であつた。下町で六十軒を数へる芸妓置屋、湯屋、料理屋、貸座敷業者を初め、呉服屋、小間物屋、雑貨屋、金物屋、八百屋、勸工場等は陶器景気に左右され、昔の確執を捨てて、一喜一憂した。――

中日事変勃発を機に、海岸は埋立てられて、大小、幾つかの軍需工場が乱立された。街から一里と離れぬ地点に、海軍の厩大な施設を持った石油貯蔵庫、兵営、飛行場が建設され、太平洋戦争突入と共に、街の戦争気分は弥が上にも最高潮に達した。――

当然の事のやうに、軍需景気が到来した。街にはカーキ色の服が氾濫し、人口は六万から一度に十万に飛躍した。呉服屋は店頭から反物を引つ込め、スフ入りの国民服や日の丸の旗を陳列した。金物屋は徴用され、近くの軍需工場に旋盤工見習として入った。勸工場の主人は、在郷軍人の分会長として、朝から街を駆け回つた。八百屋、小間物屋は出征し、店を閉ぢた。動員署長と連絡の